

# 学部進学予定者のための 日本語能力試験開発 — 文法試験を中心に —

横田 淳子・伊東 祐郎  
(東京外国語大学留学生日本語教育センター)

## 1. 研究の意義と目的

日本の大学における学部レベルの留学生の数は、1995年実績で23,460人にのぼる<sup>1)</sup>。これは同時期の大学院レベルの留学生数が18,645人であることと比べても多い。さらに、留学生受け入れの見通しとしては、2000年には学部レベルで5万人、大学院レベルで3万人という数字が示されており、学部レベルの留学生数は今後も大幅に増加することが予想される。これらの学部レベル留学生の数の中には短期留学の者も含まれるとは思いますが、学士号取得を目指した留学生の数は今後増えて行くと考えられる。

このような状況において、学部への入学選考はどうなっているのでしょうか。採用時に予備教育期間を含めて5年間の奨学金授与が保証されている国費留学生の場合を除くと、私費留学生の入学選考は、各大学が独自に行っている。日本国際教育協会では、各大学の入学選抜に供するという目的のために、「私費外国人留学生統一試験」および「日本語能力試験」を実施している。しかし、「日本語能力試験」は一般の日本語能力を測定するもので、留学生だけを対象に作成された試験ではない。大学に入学し、大学で勉学する上で必要とされる日本語能力は一般の日本語能力とは違ったものを含んでいるはずである。大学学部入学に必要とする最小限の日本語能力を有しているか否かを測定する独自の日本語能力試験の開発が望まれる所以である。

学部進学留学生用の日本語能力試験を開発するためには、学部留学生に必要な基礎日本語能力が何かを明らかにしていかなければならないが、直接的にこれを把握することは困難であるため、基礎日本語能力を探る一つ的手段として、学部進学留学生のための予備教育機関で実施されている試験を分析することとした。

1993年度は、国費学部留学生の予備教育機関として20余年の実績を持つ東京外国語大学留学生日本語教育センターで1993年12月に学部留学生に対して行った学内試験の分析を行い<sup>2)</sup>、1994年度は、日本への留学生に対する国外の予備教育機関で1994年1月の予備教育修了時に行われた試験を分析の対象とした<sup>3)</sup>。両方の試験とも、漢字・語彙・文法事項に関しては総体的に「日本語能力試験2級」<sup>4)</sup>

にはほぼ相当することが『日本語能力試験出題基準（以下、出題基準）』<sup>51</sup>との照合で確認された。しかしながら、1級に分類されている漢字・語彙・文法事項の試験項目が2級に分類されている漢字・語彙・文法事項の試験項目より必ずしも正答率が低いという結果にはならなかった等、問題項目出題基準及び問題形式などについては、さらに検討を要することが明らかになった。

学部進学留学生用の日本語能力試験としては、「ある個人の持つ語学力や学習言語に関する知識をその個人が受講したコースや使用した教科書の内容とは関係なく試すテストで、一般に、仕事やコースなど、ある特定の領域で必要とされる語学力と結び付けて実施される」<sup>52</sup>能力テストでなければならない。つまり、この種の試験は、特定の教育機関の教育内容が反映されるものであってはならず、能力測定という観点からは、一般性をもつ必要があるのである。学習者が国外・国内どこの予備教育を受けようとも、その予備教育の内容に関係なく、学習者の日本語能力を正しく測定できるものであることが望ましい。試験が特定の教育内容に片寄せず、一般性を有したものであるかどうかを検証するためには、異なる教育機関で日本語教育を受けた学習者に同一の試験を受験させ、その結果を比較・検討し、試験内容を吟味することが有効であると考えられる。

以上の点から、1995年度は、1995年1月に国外の予備教育修了予定者（国外）に実施された試験を1996年1月に東京外国語大学留学生日本語教育センター在学の学部留学生（国内）にも実施し、比較・分析した。

## 2. 試験の全体像

試験は以下の6種からなり、漢字の2つの試験以外は記号または○×で解答するものである。

1 文法	20問
2 読解	21問
3 聴解	25問
4 漢字の読みを書かせる問題	40問
5 漢字を書かせる問題	40問
6 語彙	20問

各試験ごとに、国外・国内の被験者を合計した統計量（「MIX」）、国外の被験者だけの統計量（「国外」）、国内の被験者だけの統計量（「国内」）を求めた（表1）。

(表 1 : 全体像)

## 【文法】

	M I X	国 外	国 内
有効数	1 6 6	1 2 5	4 1
総項目数	2 0	2 0	2 0
平均	9. 4 6	9. 3 0	9. 9 3
標準偏差	2. 5 9	2. 5 1	3. 2 1
最高点	1 6. 0 0	1 4. 0 0	1 6. 0 0
最低点	3. 0 0	3. 0 0	4. 0 0
信頼係数	. 4 4	. 4 4	. 5 8

## 【読解】

	M I X	国 外	国 内
有効数	1 6 6	1 2 5	4 1
総項目数	2 1	2 1	2 1
平均	1 1. 5 4	1 0. 8 0	1 3. 7 8
標準偏差	3. 6 1	3. 2 0	4. 4 1
最高点	2 0. 0 0	1 8. 0 0	2 0. 0 0
最低点	4. 0 0	4. 0 0	5. 0 0
信頼係数	. 6 5	. 5 4	. 7 4

## 【聴解】

	M I X	国 外	国 内
有効数	1 6 7	1 2 5	4 2
総項目数	2 5	2 5	2 5
平均	1 4. 5 0	1 3. 4 8	1 7. 5 5
標準偏差	3. 6 3	3. 2 6	3. 9 3
最高点	2 2. 0 0	2 1. 0 0	2 2. 0 0
最低点	4. 0 0	4. 0 0	1 1. 0 0
信頼係数	. 5 8	. 4 8	. 4 6

【漢字／読み】

	M I X	国 外	国 内
有効数	1 6 7	1 2 5	4 2
総項目数	4 0	4 0	4 0
平均	2 8 . 0 9	3 0 . 8 3	1 9 . 9 3
標準偏差	7 . 8	5 . 5 8	8 . 6 4
最高点	3 9 . 0 0	3 9 . 0 0	3 7 . 0 0
最低点	3 . 0 0	1 4 . 0 0	3 . 0 0
信頼係数	. 9 1	. 8 1	. 9 2

【漢字／書き】

	M I X	国 外	国 内
有効数	1 6 7	1 2 5	4 2
総項目数	4 0	4 0	4 0
平均	2 4 . 4 4	2 7 . 1 0	1 6 . 5 5
標準偏差	8 . 5	5 . 9 8	1 0 . 4 4
最高点	3 7 . 0 0	3 7 . 0 0	3 6 . 0 0
最低点	0 . 0 0	1 4 . 0 0	0 . 0 0
信頼係数	. 9 2	. 8 3	. 9 5

【語彙】

	M I X	国 外	国 内
有効数	1 6 7	1 2 5	4 2
総項目数	2 0	2 0	2 0
平均	1 1 . 7 5	1 2 . 0 2	1 0 . 9 5
標準偏差	2 . 8 9	2 . 4 8	4 . 1 6
最高点	1 7 . 0 0	1 7 . 0 0	1 6 . 0 0
最低点	3 . 0 0	7 . 0 0	3 . 0 0
信頼係数	. 5 3	. 3 7	. 7 3

### 3. 試験の項目分析

各試験の問題項目を『日本語能力試験の概要(試験結果の分析)』<sup>7)</sup>で用いられている基準を参考に分類した。すべての問題が四肢選択の問題でないことから、このような分類のしかたには問題があるとも思われたが、試験内容を検討する手掛かりとするためにすべての問題項目を対象に項目分析を行った。

#### 3-1. 分類基準

【水準A】・正答率が25%未満の項目。

【水準B】・正答率が25%以上、80%未満で、弁別指数が0.30未満の項目。

【水準C】・正答率が80%以上で、弁別指数が0.30未満の項目。

【水準D】・上記の水準A、B、Cに抵触しない、統計的観点からはよい項目。

#### 3-2. 分類の結果

各試験につき、「MIX」、「国外」、「国内」に分けて、それぞれの問題項目が上記の水準のどれに属するかを調査した。各マスに入っている数字は試験問題の通し番号である。(表2)

(表2：問題項目分析の結果の分類)

#### ●文 法

問題(数)		水準A	水準B	水準C	水準D
文  法  (20)	MIX	3, 6, 7, 8, 18	1, 10	11	2, 4, 5, 9, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 20
	国外	6, 7, 8, 9, 15, 18	3, 10	5, 11	1, 2, 4, 12, 13, 14, 16, 17, 19, 20
	国内	1, 3, 6, 7		8, 11, 14, 16	2, 4, 5, 9, 10, 12, 13, 15, 17, 18, 19, 20

● 読 解

問 題 (数)		水 準 A	水 準 B	水 準 C	水 準 D
(21)	M I X		3, 7, 9, 17	14, 19	1, 2, 4, 5, 6, 8, 10, 11, 12, 13, 15, 16, 18, 20, 21
	国 外	10, 21	3, 7, 9, 16, 17	14, 19	1, 2, 4, 5, 6, 8, 11, 12, 13, 15, 18, 20
	国 内		3, 5, 13, 17	4, 14	1, 2, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 16, 18, 19, 20, 21

● 聴 解

問 題 (数)		水 準 A	水 準 B	水 準 C	水 準 D
(25)	M I X	2, 18	4, 9, 24	1, 3, 11, 20	5, 6, 7, 8, 10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 19, 21, 22, 23, 25
	国 外	2, 18, 23	4, 9, 11, 12, 17, 20, 24	1, 3	5, 6, 7, 8, 10, 13, 14, 15, 16, 19, 21, 22, 25
	国 内	2	7, 8, 10, 12, 22, 24, 25	1, 3, 13, 16 19, 20	4, 5, 6, 9, 11, 14, 15, 17, 18, 21, 23

●漢字/読み

問題(数)		水準 A	水準 B	水準 C	水準 D
漢 字 / 読 み  (40)	M I X	14, 16, 27	8	4, 7, 9, 10, 12, 17, 22, 24, 25, 28, 29, 32, 36	1, 2, 3, 5, 6, 11, 13, 15, 18, 19, 20, 21, 23, 26, 30, 31, 33, 34, 35, 37, 38, 39, 40
	国 外	14, 16, 27	8	1, 4, 5, 7, 9, 10, 12, 17, 19, 22, 23, 24, 25, 28, 29, 31, 32, 35, 36, 37, 38	2, 3, 6, 11, 13, 15, 18, 20, 21, 26, 30, 33, 34, 39, 40
	国 内	2, 3, 6, 14, 16, 18, 21, 26, 27, 30, 33, 35, 37		10, 17	1, 4, 5, 7, 8, 9, 11, 12, 13, 15, 19, 20, 22, 23, 24, 25, 28, 29, 31, 32, 34, 36, 38, 39, 40

●漢字/書き

問題(数)		水準 A	水準 B	水準 C	水準 D
漢 字	M I X	20, 21, 25, 28		5, 6, 11, 13, 24, 30	1, 2, 3, 4, 7, 8, 9, 10, 12, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 22, 23, 26, 27, 29, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40

／ 書  き  (40)	国 外	20, 21, 25, 28		5, 6, 7, 9, 11, 13, 14, 17, 22, 23, 24, 30, 31	1, 2, 3, 4, 8, 10, 12, 15, 16, 18, 19, 26, 27, 29, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40
	国 内	1, 2, 20, 21, 28, 29, 32, 35, 36, 39			3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 30, 31, 33, 34, 37, 38, 40

● 語彙

問 題 (数)		水 準 A	水 準 B	水 準 C	水 準 D
語  彙  (20)	M I X	5, 10	7, 17, 20	6, 9, 12, 15	1, 2, 3, 4, 8, 11, 13, 14, 16, 18, 19
	国 外	5, 10, 14	17, 20	2, 6, 7, 8, 9, 12, 15	1, 3, 4, 11, 13, 16, 18, 19
	国 内	5, 7	11, 20	8, 12	1, 2, 3, 4, 6, 9, 10, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19

分類の結果、「国外」「国内」共通の水準に属する項目は以下のようになった。

- 「文法」では20項目中10項目（50％）
- 「読解」では21項目中12項目（57.1％）
- 「聴解」では25項目中10項目（40％）
- 「漢字／読み」では40項目中12項目（30％）
- 「漢字／書き」では40項目中18項目（45％）
- 「語彙」では20項目中11項目（55％）



#### 4. 文法問題の分析

「文法問題」は問題Ⅰ（項目番号1～10）と問題Ⅱ（項目番号11～20）の2種類から構成されている。答えはすべて四肢選択による。

問題Ⅰは、一つの文の中の空欄に適切な語句を選択肢から選んで入れる問題で、選択肢の語句は、接続詞、助詞相当句、文末表現などである。一つの文の長さは最大50字ほどである。選択肢を『出題基準』と照合すると、2級に属するものが40語句中31語句、3級に属するものが4語句であった。また、そのうち正答だけを見ると10語句中9語句が2級の語句で、試験全体のレベルとしては「日本語能力試験2級」ということができる。

問題Ⅱは、一つまたは二つの文が与えられ、その文の中の下線を引いた部分と内容が最も近いものを選択肢から選ぶ、言い換えの問題である。同じように、問題文および選択肢を『出題基準』と照合すると、問題文ではすべてが2級に属するものと判定できた。選択肢そのものは、問題文をやさしく言い換えているものなので、3級や4級に属するものが多い。試験全体のレベルとしては、やはり「日本語能力試験2級」程度とすることができるだろう。

以上のことから、「文法問題」は全体的に「日本語能力試験2級」程度の問題と言えるが、各問題項目の試験結果を見ると正答率、弁別指数の点にばらつきがあり、もう少し細かく検討してみる必要がある。

試験結果の分析では、まず問題項目の正答率および弁別指数から、各問題項目を四つの水準（A～D）に分類し、国外受験者と国内受験者の間でどのような傾向が現れるかを調べた（表2●文法参照）。問題項目により、「国外」「国内」ともに同じ水準になるものと、そうでないものがある。水準Aおよび水準Cに分類される問題を中心に以下のように8タイプに分け、内容を検討した。

- ① 「国外」「国内」ともに水準Aに属する難しすぎる項目：6、7
- ② 「国外」「国内」ともに水準Cに属する易しすぎる項目：11
- ③ 「国外」では水準A、「国内」では水準Cに属する項目：8
- ④ 「国外」では水準A、「国内」では水準Dに属する項目：9、15、18
- ⑤ 「国内」では水準A、「国外」では水準Bに属する項目：3
- ⑥ 「国内」では水準A、「国外」では水準Dに属する項目：1
- ⑦ 「国外」では水準C、「国内」では水準Dに属する項目：5
- ⑧ 「国内」では水準C、「国外」では水準Dに属する項目：14、16

①「国外」「国内」とともに水準Aに属する項目（難しすぎる問題）：6，7

【項目6】問題文：「兄はとても疲れていたようだ。家に帰って来て、ベッドに入った\_\_\_\_\_、もう眠っていた。」

	a ばかりで	b そばから	*c と戻ったら	d とみると
出題基準	※	1級	2級	※
国外 (教科書)	79.2(99) ○	4.0(5) ×	0.8(1) ×	16.0(20) ×
国内 (教科書)	82.9(34) ○-初	2.4(1) ×	4.9(2) ×	9.8(4) ×

まず、各選択肢（a～d）が『出題基準』のどの級に属しているかを見た。※はどの級にもない語句である。また、a～dの前の\*印は正答を表している。次に「国外」「国内」の教育機関のそれぞれの教科書に提出されているかどうかを調べ、既習項目か否かを判断する参考とした<sup>9)</sup>。○は教科書にあるもの、×はないもの、「国内」に関しては、さらに初級、中級の教科書の違いを記してある。「国外」「国内」の欄の数字はそれぞれの選択肢を選んだ受験者の割合をパーセントで記してある。括弧内は実数である。

「国外」「国内」とともに、b、c、dの選択肢が未習のものであったため、既習の語である「ばかりだ」の連用形「ばかりで」を選んだものが圧倒的に多い。「ばかりだ」は動詞のタ形（この場合は「入った」）に接続するし、意味的にも「ばかりだ」を「～してすぐ」と考えれば通じることになる。「ばかりだ」の細かい使い分けまで習得していない学習者にとっては大変難しい問題になったと言える。「国外」で1名、「国内」で2名が正答を選んでいるのみである。

【項目7】問題文：「最近、雨がぜんぜん降っていないが、もしこの状態があと2週間も続く\_\_\_\_\_、水不足で大変なことになるだろう。」

	a かぎり	*b ようなら	c ものなら	d かと思うと
出題基準	2級	3級	2級	2級
国外 (教科書)	48.8(61) ○	12.0(15) ×	34.4(43) ×	4.8(6) ○
国内 (教科書)	29.3(12) ○-中	19.5(8) ×	51.2(21) ×	0.0(0) ×

「国外」「国内」とともに、b、cの選択肢が未習のものである。正答b「（続く）ようなら」を構成する「よう」（状況）と「なら」（条件）はそれぞれ3級

の項目であるが、別々に学習していて、複合的な用法は未習であると考えられる。同様に、cの「もの」と「なら」やdの「か」と「と思う」なども一つ一つの単語や文型は既習であるが、それが合わさった場合、単なる二つの言葉からの類推では把握できない別の意味が生ずるので、かえって混乱し正答率が低くなったのではないかと考えられる。選択肢の語句は一見すると2級以下の語句のようであるが、それらが合わさって使われる場合、学習者はそのような用法を必ずしも類推できないのであろう。

次に、受験者の総得点を4つのグループ（最上位：H，上位：MH，下位：ML，最下位：L）に分け、それぞれのグループでの解答パターンを細かく見てみる。「国外」「国内」ともH，Lを問わず、aおよびcを選択したものが多い。正答を選択した者は「国外」では各グループにまたがっている。「国内」ではMLの半数が正答を選んでいるが、Hでは5分の1しか正答を選んでいる。

②「国外」「国内」ともに水準Cに属する項目（易しすぎる問題）：11

【項目11】下線箇所：「あの人がうそをつくことはあるまい。」

	下線箇所	a よくある	b あるはずだ	c あるかもしれない	*d ないだろう
出題基準	2級	4級	3級	3級	3級
国外 (教科書)	○	0.0(0) ○	0.8(1) ○	1.6(2) ○	97.6(122) ○
国内 (教科書)	○-中	0.0(0) ○-初	0.0(0) ○-初	4.9(2) ○-初	95.1(39) ○-初

「国外」「国内」ともに、下線部「あるまい」および選択肢すべてが学習済み表現であった。正答率が高くなり、かなり易しい問題であったことがわかる。

③「国外」では水準A、「国内」では水準Cに属する項目：8

【項目8】問題文：両親はわたしの留学に反対で費用を出してくれそうもないので、自分でお金をためる\_\_\_\_\_。

	*a ほかない	b ものだ	c ことにほかならない	d にまわっている
出題基準	2級	2級	2級	2級
国外 (教科書)	5.6(7) ×	14.4(18) ○	44.0(55) ○	36.0(45) ○
国内 (教科書)	80.5(33) ○-中	2.4(1) ○-中	17.1(7) ○-中	0.0(0) ○-初

「国外」ではHは約40%が誤答dを、Lは約60%が誤答cを選んでいる。正答のaは未習事項、他は既習事項である。

「国内」ではdを選んだ者は一人もいず、bを選んだ者も一人だけである。cを選んだものは7名である。選択肢はすべて既習事項である。

この問題は既習か未習かが直接に結果に表れた典型的な例であると思われる。

④「国外」では水準A、「国内」では水準Dに属する項目：9, 15, 18

【項目9】問題文：「前から「今の仕事はいやだ」と言っていた友人が会社をやめた。\_\_\_\_\_ 本当にやめるとは思わなかったので、驚いた。」

	a いったい	b きっと	c やはり	*d まさか
出題基準	2級	2級	2級	2級
国外 (教科書)	24.8(31) ○	33.6(42) ○	20.8(26) ○	20.8(26) ×
国内 (教科書)	4.9(2) ×	29.3(12) ○-中	7.3(3) ○-中	58.5(24) ×

「国外」においては、各選択肢を比較的平均して選択している。しかし、解答パターンを見ると、正答が未習であるにもかかわらず、Hでは半分以上の者が正答を選んでおり、反対にLでは正答を選んだものが一人もいない。正答率は20%強であるが、弁別力(0.49)の高い問題と言える。

「国内」でも、正答の「まさか」は中級までの教科書には提出されていない。しかし、正答者が60%近いことから、聴解の授業等で学習した可能性が考えられる。また、被験者は日本国内に滞在しているので、「まさか」は日常語として触れる機会が多いとも考えられる。解答パターンを見ると、LからHになるに従って正答を選んだ者が多くなっており、やはり弁別力の高い問題であると言える。(弁別指数は0.57)

【項目15】問題文：「夜遅くまで働くのはやめようではありませんか。」

	下線箇所	*a やめましょう	b やめることにしますか	c やめられません	d やめるつもりですか
出題基準	2級	4級	3級	3級	3級
国外 (教科書)	○	17.6(22) ○	12.0(15) ○	7.2(9) ○	63.2(79) ○
国内 (教科書)	○-中	43.9(18) ○-初	19.5(8) ○-初	7.3(3) ○-初	29.3(12) ○-初

「国外」で、「やめる」「～よう」は個別には導入済みであったにもかかわらず正答率が低かったのは、下線部分の否定疑問文が勧誘・提案という機能をもつものであるという学習がなされていなかったからであろうか。誤答 d「やめるつもりですか」を選んだものが最も多いことから、「やめよう」を意志表現だと判断し、下線部分と関連づけた可能性が高い。解答パターンを見ると、Hでは正答 aを選んだのと同数の者が誤答 dを選んでいる。Lでは誤答 dを選んだものが4分の3以上で一番多い。(弁別指数は0.40)

「国内」では、中級で学習した語句の入った問題文を初級の語句で言い換えるという点では問題項目11と同じであるが、動詞の意志形(～よう)と否定疑問文の形式(～ではありませんか)を使って自分の意見を述べるものが結び付いたもので少し難しくなったと考えられる。解答パターンではHでは70%以上が正答を選んでいるが、Lでは3分の1しか正答を選んでいる。(弁別指数は0.39)

【項目18】問題文：「人はけんかをしてこそ、真の友人になれる」

- a けんかをして、本当の友達でいることはできる。
- b けんかをすればするほど、友達との関係は深くなる。
- c けんかをしたら、本当の友達でいることは難しい。
- d けんかをするまでは、本当の友達にはなれない。

	下線箇所	a ~しても、~	b ~すればするほど、~	c ~したら、~	*d ~するまで、~
出題基準	2 級	3 級	2 級	3 級	3 級
国 外 (教科書)	○	36.8(46) ○	47.2(59) ○	4.0(5) ○	12.0(15) ○
国 内 (教科書)	○-中	26.8(11) ○-初	36.6(15) ○-中	2.4(1) ○-初	31.7(13) ○-初

「国外」「国内」ともに、誤答 b「けんかをすればするほど、友達との関係は深くなる」を選んだものが多い。問題文の「人はけんかをしてこそ、真の友人になれる」は、「何度もけんかを繰り返すことによって真の友人になっていく」という解釈も成り立ち、その場合は b も正答になり得る。選択肢の内容に問題があるように思われる。「国外」の弁別指数は0.09しかない。

「国内」では、Hの70%以上が正答を選んでいる。一方、Lで正答を選んだものは一人もいず、半数が誤答 aを選んでいる。「～こそ」の導入説明で使われた表現の仕方が影響しているのかもしれない。(弁別指数は0.73)

⑤「国内」では水準A、「国外」では水準Bに属する項目：3

【項目3】問題文：毎晩早く寝ようと\_\_\_\_\_、遅くまでテレビを見てしまうので、次の日、起きるのが大変だ。

	a 思いからといって	b 思いまでもなく	c 思うどころか	* d 思いっつ
出題基準	2級	1級	2級	2級
国外 (教科書)	28.8(36) ○	7.2(9) ×	37.6(47) ○	26.4(33) ×
国内 (教科書)	12.2(5) ×	7.3(3) ×	68.3(28) ○-中	12.2(5) ×

「国外」「国内」とともに正答の語句のこのような用法は未習である。「国外」では水準がBになっているが、正答率は25%をわずかに越しているに過ぎず、水準Aに大変近いと言える。正答率、弁別指数ともに低く、「国外」「国内」双方にとって難しすぎる問題である。

⑥「国内」では水準A、「国外」では水準Dに属する項目：1

【項目1】問題文：「子どもが入院して、心配\_\_\_\_\_母親まで病気になってしまった。」

	* a のあまり	b のついでに	c をこめて	d をめぐって
出題基準	2級	2級	2級	2級
国外 (教科書)	88.8(111) ○	8.0(10) ×	2.4(3) ○	0.8(1) ×
国内 (教科書)	4.9(2) ×	29.3(12) ×	34.1(14) ○-中	26.8(11) ○-中

「国外」では、正答が既習のためか正答率が高い。解答パターンではHは全員が正答を選んでいる。Lでは正答率は3分の2ほどに落ちる。そのために、正答率が高いにもかかわらず、弁別指数は0.32となり、水準はDとなった。

「国内」では、正答が未習のためか、正答を選んだ学習者が2人(4.9%)と大変少ない。「あまり～ない」(初級)、「多すぎる」という意味の「あまり」(中級)は既習であるが、正答の「～のあまり」は未習事項である。既習事項からの類推からはかえって正答を選ばない結果になったと思われる。しかし、正答を選んだ者はすべてHグループの者である。

「国外」が正答率が9割に近いことを考えると、この問題は既習か未習かが直接に結果に表れた典型的な例であると思われる。

⑦「国外」では水準C、「国内」では水準Dに属する項目：5

【項目5】問題文：このことは会議で十分話し合った\_\_\_\_\_決めましょう。

	a あげ	*b 上で	c 共に	d が最後
出題基準	2級	2級	2級	1級
国外 (教科書)	9.6(12) ○	88.8(111) ○	0.8(1) ○	0.8(1) ×
国内 (教科書)	0.0(0) ×	73.2(30) ○-中	26.8(11) ○-中	0.0(0) ○-中

「国外」では誤答c, dを選んだ者は一人ずつしかいない。ML, MH, Hすべて90%以上の正答率である。dは未習語である。

「国内」では誤答a, dを選んだ者が一人もいない。aは未習語である。MH, Hでは正答率が100%であるが、ML, Lでは誤答cを選んだものが半数前後いる。

選択肢の選び方に「国外」「国内」で違いが出るのは、選択肢の語句が未習の場合は選択しない傾向があるからのように思われる。

⑧「国内」では水準C、「国外」では水準Dに属する項目：14、16

【項目14】問題文：人口問題や地球環境などについてのニュースを見ると、人類の未来について考えずにはいられない。

	下線箇所	a なくなる	b ~ようとしても~ない	*c ~ないでいる~できない	d ~時間はない
出題基準	2級	※	※	※	※
国外 教科書	○	4.8(6) ○	12.0(15) ○	82.4(103) ○	0.8(1) ○
国内 教科書	○-中	0.0(0) ○-初	0.0(0) ○-初	100.0(41) ○-初	0.0(0) ○-初

「国内」では正答率が100%である。「国外」でもMH, Hでは90%以上が正答を選んでいるが、Lの正当率が60%ほどなので、弁別率がかろうじて0.3以上となり、水準がDになっている。問題文は2級で、問題文、選択肢は「国内」「国外」ともに既習の文型である。

【項目16】問題文：A社は来年、車の生産台数を減らさざるをえないだろう。

	下線箇所	a ことはない	b ないことになる	c のをやめる	*d なければならない
出題基準	2 級	2 級	3 級	3 級	3 級
国 外 教科書	○	12.0(15) ○	9.6(12) ○	2.4(3) ○	76.0(95) ○
国 内 教科書	○-中	2.4(1) ○-中	4.9(2) ○-中	2.4(1) ○-初	87.8(36) ○-初

「国内」では正答率が90%近い。「国外」でもMH, Hでは90%近くが正答を選んでいる。Lでは正答率が50%で、20%ほどの者がそれぞれ誤答a, bを選んでいる。これも、項目14と同様、問題文は2級の文型で、問題文と選択肢は「国内」「国外」とともに既習である。

以上の検討から、文法問題では問題項目が既習か否かということの正答率に与える影響が大きいことがわかる。学部留学生用能力試験は、受験者が「受講したコースや使用した教科書の内容とは関係なく」<sup>9)</sup>、大学という「領域で必要とされる語学力と結び付けて実施される」<sup>10)</sup>のが望ましい。既習か否かがなるべく直接に正答率に反映しないように工夫して問題を作成するべきであろう。

## 5. おわりに

文法問題では、試験の問題項目が被験者にとって既習事項であるか否かということが試験結果に直接影響する傾向がある。その影響を少なくするためには、選択肢に工夫が必要である。特に、「迷わし」がすべて未習語彙で、正答が既習語彙であるような場合には、正答が選ばれる可能性が高くなるが、このような場合には、必ずしも実力を反映した試験結果とは言えないだろう。また、「迷わし」が未習語であるために、だれもそれを選択せず、結果的に2肢または3肢選択の問題となるものもある。「迷わし」としては、どの教育機関でも既習事項であると思われる項目を入れておくほうがいいのではないだろうか。さらに、問題における未習語彙の影響を極力避けるためには、比較的やさしい問題を多くして、全体の問題数を増やすことも必要である。

試験の対象が学部進学予定の留学生と限られているのであるから、問題文を大学の場面で使われるようなものにするほうが適切であろう。例えば、「あの人がうそをつくことはあるまい」の問題文を「このような状態が21世紀まで続くことはあるまい」のような文に変えて、学部進学留学生用の日本語能力試験の性格



をより強く打ち出した方がいいと思われる。

文法問題の形式について言えば、問題Ⅰのように一つの文の中の空欄に適切な語句を選択して入れる問題は、選択肢が未習であると類推する余地があまりなく、被験者の応用力をも含めた日本語能力を正しく測定しにくい。問題Ⅱの形式は、問題文に含まれる語句がたとえ未習であっても問題文に空欄がないので全体から類推できる可能性が高い。未習か既習かの影響を少なくするためには問題Ⅱのような形式の方がいいと言える。

学部進学留学生用の日本語能力試験は、受験時点で留学生在が大学での勉学に必要な日本語能力を有しているかどうかを判断すると同時に、入学後、日本語能力をさらに伸ばしていく可能性をもっているかどうかをも判断しうるものであることが望ましい。学習要素が消化され、能力として定着し、実際のコミュニケーションの場で応用力として発揮できる力を備えているか否かを測定しなければならない。留学生在が大学等で日本語の文を読む場合を考えると、未習の語句や文型を使っている文を読むことが多々あろう。そのような場合には、前後の文脈から類推し、正しく意味を把握することが要求される。単なる語彙力、文法力だけでなく、これらに基づく類推力が必要となる。このような類推力を測定するためにも、文法試験はより読解に近いもので構成された問題Ⅱの形式のほうがいいと考えられる。

大学での勉学に必要な日本語能力はどのようなものなのか。日本語能力は高ければ高いほどいいわけであるが、入学前の予備教育に何年もかけるわけにはいかないから、勉学に必要な最低限のレベルを打ち出したい。学部進学留学生を対象とした日本語能力試験は、その最低限のレベルをクリアーしているかどうかを判断する試験とし、それ以上のレベルに関しては留学生的の専門分野、進学先の大学のレベル等に応じてさらに必要な試験を行えばいいのではないだろうか。専門分野の試験をすることによって、その分野で要求される日本語をカバーしているかどうかは付随的に測定できるはずである。

文法試験においては、例えば、経済専攻の留学生に対しては、文学作品に現れるような文型・語彙は試験に含めず、専ら日本で日常生活をする上で必要な文型・語彙と、大学で勉学する上で最低限必要な文型に限定して試験範囲とすることが望ましいと考える。

## 註

- 1) 以下の留学生の数字は、文部省学術国際局留学生課『我が国の留学生制度の概要――受け入れ及び派遣――』平成8年度版による。6ページ及び10ページ参照。
- 2) 横田・伊東・西郡（1995）参照。
- 3) 横田・伊東（1996）参照。
- 4) 2級は「やや高度の文法・漢字（1,000字程度）・語彙（6,000語程度）を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きできる能力」（日本語能力試験の認定基準より）とされている。
- 5) 国際交流基金・日本国際教育協会（1994）。
- 6) 石田（1992）18ページ。
- 7) 外国人日本語能力試験実施委員会企画小委員会（1993）。
- 8) ただし、二つの機関とも教科書だけで教えているわけではなく、ビデオ、テープなども教材として使っているので、教科書に提出されていなくても直ちに未習事項と限定することはできない。そのため、教科書のチェックのほかに、双方の機関の担当者（国外：千馬智子氏、国内：伊丹千恵氏）にあたって未習か既習かを確認した。
- 9) 石田（1992）18ページ。
- 10) 同上。

## 参考文献

- 池田央『テストの科学』日本文化科学社、1992年。
- 石田敏子『入門日本語テスト法』大修館書店、1992年。
- 外国人日本語能力試験実施委員会企画小委員会『日本語能力試験の概要1992年版』国際交流基金、1993年3月。
- 国際交流基金・日本国際教育協会『日本語能力試験 出題基準』国際交流基金、1994年11月。
- 竹谷誠『新・テスト理論』早稲田大学出版部、1991年。
- 文部省学術国際局留学生課『我が国の留学生制度の概要――受け入れ及び派遣――』平成8年度。
- 横田淳子・伊東祐郎・西郡仁朗「学部留学生の日本語能力試験開発のための基礎研究(1)」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第21号、1995年。
- 横田淳子・伊東祐郎「学部留学生の日本語能力試験開発のための基礎研究(2)」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第22号、1996年。